

訴 状

平成 28 年 1 月 29 日

3 東京地方裁判所 御中

原告訴訟代理人

弁護士 小 原



10

弁護士 齋 藤 雄



〒180-0003 東京都武蔵野市吉祥寺南町一丁目29番2号

原 告 株 式 会 社 ナ ガ セ

代表者代表取締役 永 瀬 昭 幸

15

〒107-0052 東京都港区赤坂二丁目17番12号

チュリス赤坂1204

みのり総合法律事務所（送達場所）

電 話 03（3583）3226

20

FAX 03（3583）3227

原告訴訟代理人

弁護士 小 原 健

弁護士 齋 藤 雄 司

25

〒160-0022 東京都新宿区新宿一丁目9番4号1004

（登記簿上の住所）

〒160-0008 東京都新宿区三栄町23番地1

ライラック三栄ビル2階（送達先）

被 告 株式会社 MyNewsJapan

代表者代表取締役 渡 邊 正 裕

5 損害賠償等請求事件

訴訟物の価額 金 3320 万円

貼用印紙額 金 12 万 2000 円

第 1 請求の趣旨

10 1 被告は、原告に対し、被告が運営する「MyNewsJapan」と題するインターネットウェブサイト（<http://www.mynewsjapan.com/>。以下「本件ウェブサイト」という。）から別紙1記載の記事を削除せよ。

2 被告は、原告に対し、本判決の確定した日から30日以内に、本件ウェブサイト上に、別紙謝罪記事目録の第2記載の謝罪文を、別紙謝罪記事目録の第1
15 記載の要領で1年間掲載せよ。

3 被告は、原告に対し、3000万円およびこれに対する平成26年10月25日から支払済みまで年5分の割合による金員を支払え。

4 訴訟費用は、被告の負担とする。

との判決ならびに請求の趣旨第3項にかかる仮執行の宣言を求める。

20

第 2 請求の原因

1 当事者

(1) 原告

原告は、昭和51年5月に設立された大学受験予備校である東進ハイスク
25 ール、高校受験予備校である東進スクール、中学受験塾である四谷大塚、
水泳教室であるイトマンスイミングスクール等を経営し、またフランチャ

イズシステムで運営されている東進衛星予備校ネットワークを主催するなど、全国において広く教育事業を営む株式会社である。原告が直営する東進ハイスクールは全国に 94 校存在するほか、原告と東進衛星予備校加盟契約を締結したフランチャイジーが運営する加盟校は、全国に 944 校存在する(いずれも平成 27 年 3 月 31 日現在)。これら加盟校を運営するフランチャイジーは、それぞれ上記契約に基づき全国各地で東進衛星予備校を運営するものであるが、いずれも原告とは別法人である。

(2) 被告

被告は、本件ウェブサイトを経営し、インターネットを通じニュース記事を配信する株式会社である。

2 被告の原告に対する名誉および信用の毀損行為

(1) 本件記事の掲載

被告は、平成 26 年 10 月 15 日、被告の運営する本件ウェブサイトの「ワーカー」欄において、「マイニュース」と題して、別紙 1 のとおりの記事を掲載した (<http://www.mynewsjapan.com/reports/2088>。甲 1。以下、「本件記事」という)。

(2) 見出し部分について

ア 本件記事における記述

本件記事には、見出しとして、「『東進』はワタミのような職場でした—ある新卒社員が半年で鬱病を発症、退職後 1 年半で公務員として社会復帰するまで」との記述がある (以下、「本件見出し」という)。

イ 摘示事実

「東進」とは、原告の登録商標であり、原告が運営する東進ハイスクールや東進衛星予備校全体を表示する著名な標章であるところ、本件見出しは、普通の読者の、普通の読み方によれば、あたかも「東進」すな

5 わち原告が運営する東進ハイスクールや東進衛星予備校全体もしくはその多くがいわゆるブラック企業と称されている「ワタミ」と同じような企業であり、「ワタミ」と同じように残業代を支払わず、社員を低賃金で長時間労働させる違法行為を敢行する企業で、その過酷さのため新卒社員も半年でうつ病を発症するほどであるとの事実を摘示している。

ウ 名誉および信用の毀損

10 上記事実は、虚偽であり、本件記事は、通知会社の名誉および信用をいちじるしく毀損している。東進ハイスクールや東進衛星予備校全体もしくはその多くが上記のような違法行為に及んでいるなどという事実は、存在しない。

(3) 本文中の記述について

以下、本件記事本文中の記述も、本件見出しとあわせて摘示内容を認定すべきところ、以下の記述が摘示する事実は、いずれも原告の名誉および信用を毀損するものである。

15 ア 本件記述①

(ア) 記述内容

20 本件記事には、「(原告が運営する東進ハイスクールの) 授業は、…首都圏の直営校だけでなく、同じ内容が全国に約 900 あるフランチャイズ校でも提供され…その現場は、…社員に過酷な労働環境を強いて本来支払うべき残業代を利益に換える“ブラック企業”が支えている面もある」、「『まるでニュースで聞く居酒屋チェーン店(※ワタミのこと)の様な職場だった』——新卒で、ある東進衛星予備校に入社後、連日深夜に及ぶサービス残業でタクシー代も自腹、給料が額面 20 万円未満という環境のなか、半年で鬱病と診断され退職を余儀なくされた元社員が、自身の体験を振り返り、病に至る経緯とその対処法を語った」との記述がある(以下、「本件記述①」という)。

25

(イ) 摘示事実

本件記述①は、普通の読者の、普通の読み方によれば、あたかも原告が運営する東進ハイスクールや東進衛星予備校全体もしくはその多くがいわゆるブラック企業と称されている「ワタミ」と同じような企業であり、「ワタミ」と同じように残業代を支払わず、社員を低賃金で長時間労働させる違法行為を敢行する企業で、その過酷さのため新卒社員も半年でうつ病を発症するほどであるとの事実を摘示している。

(ウ) 名誉および信用の毀損

(i) しかし、上記事実は、虚偽であり、本件記事は、通知会社の名誉および信用をいちじるしく毀損している。東進ハイスクールや東進衛星予備校全体もしくはその多くが上記のような違法行為に及んでいるなどという事実は、存在しない。

(ii) 本件記述①には、東進ハイスクールの直営校やフランチャイズ校の「現場」は「“ブラック企業”が支えている面もある」などと記載され、細部だけを取り出せば、理屈のうえでは、上記違法行為が東進ハイスクールや東進衛星予備校のごく一部に過ぎないかのような読み方があると主張できるように細工されている。

しかし、本件見出しは、上記のとおり、『東進』はワタミのような職場でした—ある新卒社員が半年で鬱病を発症、退職後1年半で公務員として社会復帰するまで」というものであり、本件見出しと本件記述①を合わせて読めば、上記細工にもかかわらず、本件記述①が、上記違法行為が東進ハイスクールや東進衛星予備校を含む「東進」全体もしくはその多くの現状を指すものであるとの印象を与えるものであることは、明らかである。

イ 本件記述②

(ア) 記述内容

本件記事には、本件記述①に続き、「教えるというより、教材&自習ブースの権利を提供」という小見出しのもと、「社員が教育に直接関わる業務は、各生徒の勉強の進捗管理などを行い、サポートすることくらいです。各自に勉強の内容を教えるわけではないため、このやり方だと、落ちこぼれを引き上げることは難しいのが実情です。『元から勉強する人物になら、さらに成績アップにつながる類いの勉強法』だと思えます。」「勉強を教えるというよりも、『教材や自習ブースを利用できる権利を提供している』というイメージが、正しいと思えます。」との記述がある（以下、「本件記述②」という）。

(イ) 摘示事実

本件記述②は、東進ハイスクールや東進衛星予備校は、落ちこぼれを引き上げることは難しいのが実情で、もともと勉強する人物をさらに成績アップにつなげる程度のことができるにすぎないこと、東進ハイスクールや東進衛星予備校では勉強を教えるのではなく、たんに「教材や自習ブースを利用できる権利を提供している」にすぎず、生徒に対する指導など行われていないかのような事実を摘示している。

(ウ) 名誉および信用の毀損

(i) 上記摘示事実も虚偽であり、本件記事は、通知会社の名誉および信用をいちじるしく毀損している。

(ii) 東進ハイスクールや東進衛星予備校では、生徒各自の現状や希望に合わせ、いかなる講義をいかなる順序で受講するのが効果的かを判断し指導するとともに、生徒各自の進度にあわせて進学の相談に応じ、また、校舎ごとにイベントを企画し進行させている。

「東進」の各校舎では、落ちこぼれるような生徒を出さないために日々努力が注がれ、受講や模擬試験に積極的に参加するように呼びかけ、実際多くの生徒が「東進」の校舎で落ちこぼれなどに

なることなく、志望校に合格している。上記校舎では、どんな地方でも教育の機会均等の目標のもと多数の講義が様々なサービスとともに提供されているのであり、たんに「教材や自習ブースを利用できる権利を提供している」などという教育がされているということは、まったくない。

本件記述②によって摘示された上記事実を、少なくとも、あたかも東進ハイスクールや東進衛星予備校のすべて、もしくは多くに当てはまるとされている点で、本件記事は、通知会社の名誉および信用をいちじるしく毀損するものである。

ウ 本件記述③

(ア) 記述内容

本件記事には、本件記述②に続き、「離職率は年 4 割超」との小見出しのもと、「(本件記事の取材対象者 (以下、「本件対象者」という。) は、) 入社前年の冬から仕事を始め…正社員の先輩が 3 人いた」「この先輩方は、私が入社する頃には全員がやめており、後になって、年間の離職率が 4 割を超えている、と聞きました。別の先輩が『一体何人辞めさせる気だ』と憤っていたことを覚えています」との記述がある (以下、「本件記述③」という)。

(イ) 摘示事実

本件記述③は、東進ハイスクールや東進衛星予備校のすべて、もしくはその多くでは年間の離職率が 4 割を超える程度の高率であり、実際、短期間に多くの者が退職しているかのような事実を示唆し摘示している。

(ウ) 名誉および信用の毀損

(i) 上記摘示事実も虚偽であり、本件記事は、通知会社の名誉および信用をいちじるしく毀損している。

(ii) 本件対象者が勤務した会社における勤務状態については、原告が事実を直接体験しているわけではないが、本件記事が、あたかも本件記述③中に記述された労働実態が東進ハイスクールや東進衛星予備校のすべて、もしくはその多くに共通するものであるかのごとく示唆して摘示している点で虚偽であり、この点でも、本件記事は、

通知会社の名誉および信用をいちじるしく毀損するものである。

なお、原告自体の2014年入社者の離職率は7.8%にすぎず、本件記事は、この点でも「東進」本体の離職率を一顧だにせず(原告に対する事前取材すら行っていない。)、原告を一方向的に誹謗するものであって、とうてい看過することができない。

エ 本件記述④

(ア) 記述内容

本件記事には、「予備校社員の1日」との小見出しのもと、本件対象者が実行した業務の内容について、「出勤も退勤も時間通りだった事はありません。そもそも、就業規則や雇用契約書といった書類は目の付くところにはなく、何がやるべき業務だったのか、何時から何時までが勤務すべき時間帯だったのか、正確なことは今でもわかりません。昨今、居酒屋チェーン店のブラックな職場が報道されていますが、そんな感じでした」との記述がある(以下、「本件記述④」という)。

(イ) 摘示事実

本件記述④により、東進ハイスクールや東進衛星予備校のすべて、もしくはその多くでは、出退勤も時間どおりであったことはなく、就業規則や雇用契約書も従業員には見せず、勤務時間も正確にはわからず、「居酒屋チェーン店のブラックな職場」と同じような違法な労務管理がされているとの事実を示唆し摘示している。

(ウ) 名誉および信用の毀損

上記摘示事実も虚偽であり、本件記事は、通知会社の名誉および信用をいちじるしく毀損している。

オ 本件記述⑤

(ア)記述内容

5 さらに、本件記事においては、「トラブル対応で午前3時まで」との太字の小見出しのもと、「動画が校舎内の回線不調や生徒のパソコンの設定が原因で見られなくなる、重くなるなどの事態が起き…苦情が寄せられますが…この種のトラブル対応を午前3時ごろまで続けていた」との記述があり、「ネットカフェ泊り、月収はずっと20万未満」
10 との太字の小見出しのもと、「定休に休めないという状況は想定外ではありましたが、社会とはそういうものだと言い聞かせ、14連勤の後に半休といった勤務も経験しました。業務の処理に追われて午前2時、3時にやっと校舎を出る、といった状況もほぼ毎日になってきました。終電はありませんからタクシーで帰宅したり、校舎に近い場所にあった知人の家やネットカフェに泊まるなどして数時間仮眠、起きてすぐにチラシ配りなどに出勤という生活でした。もちろん、タクシー代はおるか、残業代も出ません。」「結局、一度も手当てを含めた月給が額面
15 で20万円を超えたことはありませんでした」との記述がある。

また、本件記事には、「精神科が『明らかな鬱病』」との太字の小見出しのもと、「9月の初め頃だったと思いますが、私の様子を見かねた
20 知人らの意見によって精神科にかかりました。明らかな鬱病だと診断され、3ヶ月の休職を勧められました」「結局、休職期間中では回復せず、自然退職という形で処理されました」との記述がある。

さらに、本件記事には、「肝臓の数値が基準の7倍以上だった」などの太字の小見出しのもと、「初診の際に受けた血液検査では、肝臓の数値が基準値の7倍以上にもなっていました。」との記述がある（以下、
25

以上をあわせて「本件記述⑤」という)。

(イ) 摘示事実

本件記述⑤によれば、本件対象者が勤務した東進衛星予備校では、ほとんど休日もなく、毎日のように午前 2 時、3 時まで働かされ、タクシー代はおろか残業代も出ない状態であり、しかも手当を含めた月給が額面で 20 万円を超えることはない低賃金で、このためついに本件対象者は「明らかな鬱病」を発症して休職し、そのさい肝臓の数値も 7 倍以上になる重病となる有様で、東進ハイスクールや東進衛星予備校のすべて、もしくは多くが、おおむねこれと同様の状態であるとの事実が示唆され、摘示されている。

(ウ) 名誉および信用の毀損

上記摘示事実も虚偽であり、本件記事は、通知会社の名誉および信用をいちじるしく毀損している。

3 損害

本件記事は、今でも Web サイトに掲載されている。グーグルやヤフージャパンの検索サイトで「東進」との文言で検索すると、本件記事の見出し部分「『東進』はワタミのような職場でした—ある新卒社員が…」の部分が表示される。その表示は、グーグルでは 5 番目、ヤフージャパンでは 3 番目で、いずれも最初の画面に表示される(甲 2 の 1、甲 2 の 2)。これら検索サイトの影響力は甚大であり、予備校を志望する生徒や就職を希望する若者のうち多くが本件記事や、少なくともその見出しの冒頭部分を閲覧しているものと認められる。

これにより、原告が運営する東進ハイスクールや原告が主催する東進衛星予備校に対する入学を避けたり、入社しなかったりした者も多数いると予測されるほか、原告は、その名誉および信用を大きく毀損されるとともに、

日々その損害は更新されている。

原告は、被告の違法行為をただすため、数次にわたって書面をもって本件記事の削除を求め、丁寧に説得に努めてきた（以上、甲 3、4、6、8 および 10）。しかるに、被告は、独自の見解に固執し、取材依頼と称する回答書を送付したばかりか（以上、甲 5、7、9 および 11）、原告代理人の書面から、自己に都合のよい部分のみを摘記して本件記事類似の記事を掲載し、さらに違法行為が是正されない場合の当然の訴訟の予告についても、「訴訟テロ」などと称して誹謗する有様である（甲 13～18）。

これらの事情を総合すると、原告が本件記事により被った名誉および信用の毀損に基づく損害は、3000 万円を下ることはない。

4 本件記事削除の必要性

本件記事は、平成 26 年 10 月 25 日に本件ウェブサイト上に公開されてのち、四六時中、世界中のあらゆる読者から閲覧可能な状態に置かれている。

被告から原告に対し金銭的に損害が賠償されたとしても、虚偽の事実により構成される本件記事による原告の名誉および信用の毀損は、なお日々更新し続けられ、繰返されるものであって、原告としてはどうてい受忍しがたいところである。本件記事はすみやかに削除されるべきである。

5 謝罪文掲載の必要性

本件記事は、平成 26 年 10 月 25 日に本件ウェブサイト上に公開されてのち、1 年以上の長きにわたり、四六時中、世界中のあらゆる読者から閲覧可能な状態に置かれていた。その間に本件記事を閲覧し、摘示事実が真実であると誤信した読者は膨大であると言うべきである。

そのため、被告から原告に金銭的に損害が賠償され、かつ本件記事が削除されたとしても、本件記事記載の各摘示事実が真実であるとの読者の誤信を

解くことは容易ではなく、被害は容易に回復されない。被告は、プロの報道機関であり、虚偽の内容の記事を再三の注意を無視して掲載し続けてきた責任は重大である。

上記のとおりであるから、別紙謝罪記事目録の第 2 記載の謝罪文を、別紙謝罪記事目録の第 1 記載の要領で掲載させ、広く自己の行為が誤りであったことを認めさせ、自らの違法行為によって他人の権利を侵害したことを謝罪させるべきである。

7 結語

よって、原告は、被告に対し、(1)本件ウェブサイトから原告の名誉および信用を毀損する別紙 1 記載の記事を削除すること、(2)本判決の確定した日から 30 日以内に、被告が運営する本件ウェブサイト上に、別紙謝罪記事目録の第 2 記載の謝罪文を、別紙謝罪記事目録の第 1 記載の要領で 1 年間掲載すること、(3)損害賠償金 3000 万円およびこれに対する平成 26 年 10 月 25 日から支払済みまで年 5 分の割合による金員を支払うことを、それぞれ求める。

証拠方法

別紙証拠説明書記載のとおり

添付書類

1	訴状副本	1 通
2	甲号各証写し	各 2 通
3	資格証明書	1 通
4	委任状	1 通

以上

別紙1

「東進」はワタミのような職場でした——ある新卒社員が半年で鬱病を発症、退職後1年半で公務員として社会復帰するまで

お気に入り記事へ保存

01:14 10/15 2014

MNJ 取材班

「代ゼミ」が大リストラ(来年3月末で27校中20校を閉鎖、40歳以上に早期退職募集)に踏み切るなど少子化で苦しい予備校業界。「勝ち組」の東進ハイスクールは、「今でしょ!」の林修先生に代表されるスター講師の授業を全国にデジタル横展開することで躍進してきた。その授業は、ほぼ全てが人気講師によるDVDやネット配信によるオンデマンド講義で、首都圏の直営校だけでなく、同じ内容が全国に約900あるフランチャイズ校でも提供される。一見、合理的なチェーン展開にも見えるが、その現場は、教育分野の持つ理性的なイメージとは裏腹に、社員に過酷な労働環境を強いて本来支払うべき残業代を利益に換える“ブラック企業”が支えている面もある。「まるでニュースで聞く居酒屋チェーン店(※ワタミのこと)の様な職場だった」——新卒で、ある東進衛星予備校に入



東進で、社会復帰に1年半かかるほどのダメージを受けたインタビュー(現20代後半)。

社後、連日深夜に及ぶサービス残業でタクシー代も自腹、給料が額面 20 万円未満という環境のなか、半年で鬱病と診断され退職を余儀なくされた元社員が、自身の体験を振り返り、病に至る経緯とその対処法を語った。

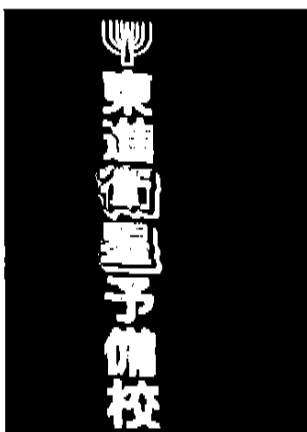
【Digest】

- ◇教えるというより、教材 & 自習ブースの権利を提供
- ◇離職率は年 4 割超
- ◇予備校社員の 1 日
- ◇トラブル対応で午前 3 時まで
- ◇ネットカフェ泊り、月収は 20 万未満
- ◇精神科が「明らかな鬱病」
- ◇肝臓の数値が基準の 7 倍以上だった
- ◇行政事務職として市役所に
- ◇充実した休日を過ごせる環境が重要
- ◇質問の答えが返ってくる職場
- ◇早々に職場を離れよ

-
- ◇教えるというより、教材 & 自習ブースの権利を提供

私が大学院を卒業後、関西にある東進衛星予備校の一つに新卒で正社員として入社したのは、2011 年の春でした。もともとモノを教えることが好きで、学生時代に教育産業に興味を持ったこともあり、この業界を選びました。別の予備校にも内定を得ましたが、そこは勤務地が名古屋で引越が必要だったこと、そして、東進衛星予備校は当時から著しく業績を伸ばしていた企業グループだったことから、この会社を選

扱しました。



インタビューが勤務していた東進衛星予備校。個人の特定を避けるため社名は伏せる。

衛星校

同期は私を含め、覚えている範囲で8人。うち6人が女性でした。私は希望通り教育部門に配属されました。他にエステ部門、生花を扱うフラワー部門などがあり、社員数は全て合わせて100人ほど。教育部門には塾・予備校が全部で12~13校あったと思います。

そのうち、高校生を対象とした10校ほどを、東進グループにフランチャイズ加盟して「東進衛星予備校」の看板を掲げ、運営していました。

東進は、直営校が首都圏にある「東進ハイスクール」、それ以外の地域では「東進衛星予備校」となりますが、提供するサービスの内容に大きな違いはありません。

『情熱大陸』では、林修先生が東進で生徒を前にして生授業をする様子が紹介されていたが、あれは全国で月に数回だけの「特別公開授業」であって、例外だ。ほとんど全ての東進の授業は、生徒がいない状態でカメラ向けに講義を行い、その動画コンテンツが、衛星・直営問わず、自習ブースで各生徒に提供される形式をとる。

東進の校舎には、講師は1人もいません。社員が教育に直接関わる業務は、各生徒の勉強の進捗管理などを行い、サポートすることくらいです。各自に勉強の内容を教えるわけではないため、このやり方

だと、落ちこぼれを引き上げることは難しいのが実情です。「元から勉強する人物になら、さらに成績アップにつながる類いの勉強法」だと思います。

人数的に、1人1人に時間を割く余裕はありません。生徒数は時期によってまちまちですが、受験直前になると1校につき最低でも40人前後になります。学費は生徒1人あたりで大体年30万から40万円ほどになり、受講する教科の数で増減します。通常のカリキュラムに加え、夏期冬期の特別講習を受けるとさらに16万円ほどかかるなど、時期によって売り上げも左右されることになります。

勉強を教えるというよりも、「教材や自習ブースを利用できる権利を提供している」というイメージが、正しいと思います。

私が担当した校舎は現役生ばかりで、多い時には50人ほど在籍していました。

そもそも当初より業務範囲は特に限られておらず、辞令には「予備校への勤務を命ずる」と書かれていましたので、仕事の内容についての入社前後のギャップはありませんでした。



インタビューの配属辞令。希望通りだった。役員隠蔽

◇離職率は年4割超

入社試験は、エントリーシートでの選考から始まり、出席必須の説明会、筆記、数回の面接を経て、最後に会社の理念に基づいた事業のプレゼンを、社長の前で行いました。

このプレゼンの評価が非常に高く、社長直々に「歴代の採用試験プレゼンの中で最も良い出来だった」と高く評価されました。この件も入社理由の一つになりました。今考えると、褒められて舞い上がってしまったのだと感じます。

私は内定後にアルバイトとして業務に携わるようになったので、実際には入社前年の冬から仕事を始めていました。この時点での業務は、掃除などの雑用と校舎の開け閉め、入校希望者への営業などです。正社員の先輩が3人いたこともあり、アルバイト時点では楽しく過ごせました。

しかし、この先輩方は、私が入社する頃には全員がやめており、後になって、年間の離職率が4割を超えている、と聞きました。別の先輩が「一体何人辞めさせる気だ」と憤っていたことを覚えています。

◇予備校社員の1日

正社員となった時点で、この男性以外の人員は、シフト制のアルバイトが数名だけ。アルバイトは別の校舎での業務も兼任しており、担当する校舎に常勤となった男性にほとんどの仕事が集中する形となった。複数の校舎を管轄するエリアマネージャーと呼ばれる女性が直属の上司となったが、彼女も電車で15分ほど離れた別の校舎に勤務していた。実質1人となった男性に対して、会社側が人員補充などの手立てを講じることもしばらくなかったという。

主要な業務の一つである営業は、まず営業トークの吹き込まれた音源を丸暗記することから始まります。これは会社が独自に作った物で、夏期講習の前など生徒を集めたい時期に配布されます。文言こそ

変わるものの、内容は概ね学習方法の説明や他校との違い、メリットの紹介などでした。正社員になりたての時期は、それをテープ起こして原稿にして覚えるなど、まだ余裕がありましたが、すぐにそれも難しくなりました。

朝は受け持ち地域にある5校ほどの高校の周辺でチラシ配りです。登校する生徒を目標にしているのですから、午前7時半ごろには現場に到着していないといけません。このチラシを手配する仕事も、自分の仕事でした。会社から送られてくるチラシを折り込む、ファイルにまとめる、時には粗品の消しゴムなどを付ける、といった雑用ですので、前日までの業務の合間を縫って作業していました。

午前9時前にチラシ配りを終わると、昼頃に上司の勤務する校舎に集合してミーティングがありました。昼まではいったん家に帰る事も認められていましたが、住んでいた下宿が遠方だった事もあり、私は直接出勤していました。ここでは営業トークのテスト、模試や企画の打ち合わせが主です。また、生徒に配るお菓子や単語帳といった粗品の取り決めなどもありました。

ミーティングは数時間続けられますが、途中で開校時間が近づけばそれぞれ自分の担当校舎に出勤していきます。私の校舎では大学受験を控えた現役生が対象で、生徒数は多い時で約50人ほどでした。私の場合、大体午後4時前までには掃除や備品を揃えるなどの準備を終わらせなければならなかったため、ミーティングはよく途中で退席しました。退席後のミーティングの内容が通達されることはまれでした。

生徒たちが来校したら、その日の主要な業務が始まります。生徒への個別の面談とそのスケジュール調整、個人ごとに週単位で予定されている学習計画に遅れがないかのチェック、模試の反省点の相談、自習ブースの予約やキャンセルの受付など、主に生徒に対する業務をこなしていきます。

これと平行して、先述したチラシセットの作成のほか、バイトのシフト組み、コピー用紙や粗品の買い出し、金銭管理、売り上げ報告書や生徒の親に宛てた手紙の作成などの雑務をこなしていきます。

新規の入校希望者が来れば営業として面談を行います。上司が営業する場合もあり、その際の日程調整も自分の仕事でした。仕事は多岐にわたるので一つ滞ると他の作業全てが押すことになります。チラシの折り込みなどの簡単な仕事ならある程度はアルバイトに負担してもらいましたが、そもそも常勤は自分だけなので結局は雑用も含めたほとんどの仕事を処理していました。

閉校時間が来ても生徒が残っていれば扉を閉めるわけにもいかず、午後 11 時過ぎに閉めていました。そこからさらに遅れた仕事を取り戻すための残業が始まります。規定として説明された就業時間は午後 2 時から午後 10 時半まで。

ですが、出勤も退勤も時間通りだった事はありません。そもそも、就業規則や雇用契約書といった書類は目の付くところにはなく、何がやるべき業務だったのか、何時から何時までが勤務すべき時間帯だったのか、正確なことは今でもわかりません。昨今、居酒屋チェーン店のブラックな職場が報道されていますが、そんな感じでした。

◇トラブル対応で午前3時まで

仕事が遅れる理由は様々です。もちろん、私のミスもありましたが、対処できないような予想外のトラブルも原因となりました。

私の校舎では新しい試みとしてインターネット回線で授業の動画を配信する取り組みが行われていました。当時、東進衛星予備校では講師の授業風景を録画したDVDを貸し出し、生徒はこれを自習ブースで見ながら個人ごとの計画に沿った学習を進める仕組みでした。その点、私の校舎の取り組みでは、パソコンさえあれば家に居ながらも授業が受けられる利点があり、いわば営業のウリになっていました。

ところがその動画が校舎内の回線不調や生徒のパソコンの設定が原因で見られなくなる、重くなるなどの事態が起きます。苦情が寄せられますが私の知識では別のブースのパソコンをあてるなどの簡単な対処しか出来ませんでした。マニュアルはありましたが限られたケースの対応しか記載されていません。さらに、他の校舎ではDVD貸し出しが主だったため解決策の共有も行われず、業者を手配するなどの対策もありませんでした。この種のトラブル対応を午前3時ごろまで続けていた覚えもあります。

こうした報告を上司にあげると「対応が悪い」と叱責されます。これはほんの一例で、何がミスなのか、どうすれば良かったのかも説明されないまま怒られることは度々ありました。どんどん萎縮していき、いつのまにか聞きたいことがあっても叱責が怖く、聞けない環境に追い込まれていきました。衛星予備校同士の合同研修会や校舎の視察に、東進ハイスクール本部の人が来ることもありました。ですが校舎の雰囲気や経営状態を見に来るといった意味合いが強く、労働状況の改善

は望めませんでした。

上司は仕事をしないわけでは決してなく、むしろかなりのやり手でした。私のミスの尻ぬぐいをしてくれた事もあります。ですが、言葉の端々や態度から「なぜ私が下っ端の責任を取らなくてはならないのか」といった雰囲気があったと感じていました。

やむを得ない理由で飲み会を断っても「上司が声かけして、皆が行こうという気になっている時に断るのは非常識」と叱責されます。今振り返ると、徐々に体調が悪くなり、比例してミスが増え続ける新人を相手にそうした態度が出る気持ちも理解はできます。あの叱責が上司なりの教育であり、内容自体は間違っていなかったと当時から思っています。ただ、その時の私にとって、それは仕事や人間関係に対するストレスを招くだけの結果になっていました。顔を合わせれば何か怒られるのではないかと怯えていました。

◇ネットカフェ泊り、月収はずっと 20 万未満



深夜まで働いてもタクシー代は自腹。残業は、すべてサービス残業とされ、月給が額面 20 万円を超えたことは一度もなかった。倉田 隆雄

4月以降、過酷な労働環境にさらされ続けた男性に、徐々に不調の兆しが見え始める。しかし、仕事は増える一方で休日返上で働くものの追いつかず、その上、ゴールデンウィークの休みも生徒の親からの苦情で急遽取りやめになるなど、気の休まる暇のない日々が続いたという。

休みは隔週の土曜、そして毎週日曜が定休でした。しかし、模試があれば日曜の

休みは無くなります。さらに春夏冬は生徒の長期休み前の講習、秋は模試が多く予定されていて、その準備に追われるため繁忙期はたびたびやってきます。定休に休めないという状況は想定外ではありましたが、社会とはそういうものだと言い聞かせ、14 連勤の後に半休といった勤務も経験しました。

業務の処理に追われて午前2時、3時にやっと校舎を出る、といった状況もほぼ毎日になってきました。終電はありませんからタクシーで帰宅したり、校舎に近い場所にあった知人の家やネットカフェに泊まるなどして数時間仮眠、起きてすぐにチラシ配りなどに出勤という生活でした。

もちろん、タクシー代はおろか、残業代も出ません。基本給は約 17 万円ほどで、鬱病で倒れる直前はタクシー代だけで大変な出費になっていました。手当は、家賃もしくは定期代の補助で、どちらも、金額は出ませんでした。結局、一度も手当を含めた月給が額面で 20 万円を超えたことはありませんでした。

そもそも、「早出も残業もそうしなければ仕事をこなせない以上、仕方が無い事だよ」という趣旨の言葉が当たり前のように出てくる職場でした。

7月に入る頃になると、ミスも激増し上司から叱責される頻度も増えました。主に電話やメールなどでしたが、時には直接、生徒に聞こえるほどの怒鳴り声を上げられることもありました。ミスをするとそれを取り戻そうと必死になるのですが、そこでまたミスが出て怒られてさらに縮こまる。「そんなこともわからないのか」と言われることが怖く、殺伐とし

た雰囲気の中で質問も出来ない。

そうするうちに暗記すべき営業トークが覚えられなくなる、備品の数が数えられなくなるなど、基本的な事柄がこなせなくなってきました。上司も校舎の運営が難しくなっていると判断したのか、新しいアルバイトが2人雇われましたが、どちらもすぐに辞めてしまいました。原因はわかりません。しかし、「バイトが辞めたのはお前のせいだ」と激しく怒られました。

他の校舎の先輩が様子を見に来てくれたこともあります。この頃は、上司や他の先輩に自分の仕事の押しで迷惑をかけているという気持ちが強く、とにかく申し訳なさで周囲から信頼されない自分への悩みでいっぱいだった時期でした。

物事が出来ないサイクルに入っていたけれど、それでも何とかしないといけないと思い悩んでいました。がむしゃらにはなっていましたが、私の会社の社長にあてた報告メールだけは本当に嫌で仕方ない仕事でした。

一日が終わると、その日の業務やミスの内容、反省点や改善点、さらに自身が感じた成長の実感まで併せて書いて報告します。メールに返信が来ることもあり、社長直々に叱責されることもありました。なぜ書いているのかの理由もわからず、いかに怒られないような文面にすることを考えているだけで時間がかかるようになりました。最終的に毎日送るよう求められ、睡眠時間を削ってでも書くしかなくなりました。何を書いていたのか今でも思い出せず、この影響でメールを嫌うようになりました。

生徒たちが夏休みに入るとミーティングに出なくてもよくなったので、多少は持ち直しました。しかし、ミスはさらに多くなり、先述のメールとは別に上司へ日報を提出するよう命じられました。内容は同じくミスや業務の報告などですが、同じ文面を書くわけにもいかず、睡眠時間はますます減っていきました。さらに、別のエリアマネージャーからも何か反省文を提出するよう言われました。もはや何のためにどんな作業をしているのかもわからなくなり、情緒不安定はさらに進みました。

8月の末ごろになると男性の症状は重くなり、日常生活にも支障をきたし始めた。自責の念はさらに進み、周囲の助言もあり精神科にかかることになった。そして鬱病と診断され、休職することとなった。

生徒との面談中にわずかの間ですが突然意識を失う、砂嵐がかかったように物が見えにくくなるなど、明らかな不調を覚えました。また、突然泣き出しながら「ごめんな、ごめんな」と呟いたり、自分の周りが透明なガラス張りにされて様々な物から隔離されているような感覚に陥りました。体は重く、世の中の全てに強い申し訳なさを感じていました。

この環境から逃げ出したい気持ちはあったと思います。ですが、言いようのない焦燥感の方がずっと強く、それだけで体を突き動かしていました。逃げたいと思うことが間違いだとすら思っていた節がありました。残業も自分のミスで残っているのに逃げ出すわけにはいかないと言い聞かせて、自分をごまかしていたのでしょう。

◇精神科が「明らかな鬱病」

9月の初め頃だったと思いますが、私の様子を見かねた知人らの意

見によって精神科にかかりました。明らかな鬱病だと診断され、3ヶ月の休職を勧められました。その時、安心感や絶望感というよりも、ぷつんと糸が切れたような、もう戻れないんだなといった気持ちを抱きました。

会社に診断結果を伝えると、翌日になって回答がありました。「休職期間は勤続年数によって変わってくると就業規則で決められている、入社半年程度のあなたは1ヶ月が限度」というものでした。就業規則があることはその時初めて知りました。結局、休職期間中では回復せず、自然退職という形で処理されました。

診断された次の日から、実家での療養生活が始まりました。会社とのやり取りや下宿の引き払いなど手続き関係は両親に代行してもらいました。当初は食事をしたいといった基本的な欲求すら感じず、寝てばかりの生活でした。

◇肝臓の数値が基準の7倍以上だった

胸騒ぎのような、漠然とした焦りはこの時もまだ感じていましたがそれでも体は動かないのです。療養とはいえ、家族に甘えている生活に心苦しさも感じていました。やがて、気を紛らわせるように洗い物などを手伝うようになり、療養を始めてからおよそ3、4ヶ月目ぐらいからはランニングや散歩する程度なら出来るようになりました。

おそらく、診断があと1ヶ月でも遅れていればもっと回復に時間がかかったのではないのでしょうか。初診の際に受けた血液検査では、肝臓の数値が基準値の7倍以上にもなっていました。心も体も限界を迎えていたのだと思います。

半年を過ぎると、料理をするなどの日常生活を送れるまで回復しました。意欲もわき、将来に向けて建設的な思考が出来るようになりました。公務員をめざし、試験のために予備校に通い始めたのも、この頃です。同時に、別の塾で、今度は講師としてアルバイトを始めました。なぜまた塾なのか、今でも不思議ですが、学生時代に経験していたアルバイトでもあり、何より周囲の同僚と相談しながら仕事ができる環境に心安さがあったのでは、と思います。

この経験は、社会復帰に向けた大きな助けとなりました。一度、徹底的に破壊された心の柱の様な物が取り戻せたと感じられ、自分は何も出来ないわけではないという自信につながりました。

◇行政事務職として市役所に

そして退職から一年半後、私は地元市役所の市職員採用試験に受かり、行政事務職として再就職できたのです。再び新卒としての採用でした。倍率は約 10 倍ほどで筆記、作文、集団討論をへて面接、というプロセスでした。

合格前に、別の自治体の市役所も受けましたが、そちらは落ちました。鬱を経験したからか、思ったよりも落ち込まずに結果を受け止められたことに、自分でも驚きました。少しだけ強くなれたのかもしれませんが。ともかく、合格したことで、ようやく感じ続けていた焦りと申し訳なさから解放された気分でした。

社会復帰を果たした男性は、現在も市役所職員として働いている。現在の職場も残業や突発的な案件は多く、時にはかつての職場よりも忙しいと感じることもあるという。それでも続けられている理由に男

性は、職場環境の重要性があると指摘する。

今の職場も決して楽な職場ではありません。監査や選挙の時などは早朝に出勤し、日付が変わってから帰宅することもあります。何よりも、市民の生活に直接影響するような判断を迫られる場合もあり、案件ごとにかかるストレスという面では現在の方が上だと断言できます。

◇充実した休日を過ごせる環境が重要

もちろん、きちんと定休があるという点では以前よりも楽ですが、それよりも充実した休日を過ごせる環境が重要だと感じています。自分が休んでいても、空いた穴を他の誰かが埋めてくれるだろうという安心感があり、体だけではなく心も休まるのです。この感覚があるおかげで、他の人が休んでいる日には代わりに自分が頑張ろうという心構えを持てるようになりました。

こうした環境はいくら制度や規則で整えようとも、実際に働いている人同士の関係性や職場の雰囲気や破綻していれば機能しない物だと思います。以前の職場は、「辛い」や「苦しい」といったネガティブな発言や「面倒だ」など、仕事に対する弱音や愚痴を吐くことは社会人としての禁句であるかのような雰囲気でした。

今は違います。煩雑な手続きや突発的なトラブルへの愚痴が、笑い話として気軽に言い合える職場です。こうした明るい愚痴の言い合いは一種のコミュニケーションで、困難さを共有できる連帯意識のような感覚を作ります。

人間ですから、どうしたって不満や文句は出ます。それが仕事であれば、なおさらです。感情を無理に押さえつけて作った見せかけだけ

の良い雰囲気は、どこかで歪んだプレッシャーになって働く人にのしかかっています。愚痴を言うだけでは職場のモラルや志気は決して下がりにません。

このような会話ができるのは、やはり職場と同僚に対する信頼関係が大きいと思います。こうした関係は例えば仕事上の質問をして、それにきちんと答えてくれることで築けていけるものだと思います。

初めての職場に入った人がわからないことだらけなのは当然で、そんな状況がしばらく続いていく。そんな中で先輩に質問をして、きちんと答えてもらえるというやり取りは本当に安心できるものなのです。


忙しい、時間が無いなど理由はそれぞれだとは思いますが、質問をただで邪険に扱われるような雰囲気は、最悪です。本来、わからない者はわからないことを聞かなくてはダメなのです。そして職場や会社は、聞ける雰囲気を作っておかなければ、辞めていく人、病んでしまう人の増加につながっていく。

◇質問の答えが返ってくる職場

私の場合は、基本的な質問をして、たとえ後回しになっても答えが返ってくる安心感が、やがて職場への信頼感に変わっていきました。休日の際の心構えも、こうした下地があってこそだと思います。質問と返答は、良い職場環境作りの基本的な部分です。精神論で気持ちを抑えつけるよりも、労働者として当たり前抱く本音や質問が言い合える環境が良い職場なのではないでしょうか。

さらに管理職の存在も重要です。「責任は取るから、思うようにやってこい」の一言がどれだけ下の者に安心を与えられるのか、今の職場

す。良い悪いという話ではありません。それでもそこで頑張っていきたいのなら、第三者の意見を良く聞いて自分を客観視できるようにしておくべきです。そして、職場で感じる仕事をする上での常識と自分の本音は分けて考える。職場の常識を正しいことだと無理に信じ込み、馴染めない自分が間違っていると考えてはいずれ何かがおかしくなるのだと思います。

この秋から私にも後輩が出来ました。自分も教える立場となり、仕事の中で色々と質問が投げかけられます。まずはそれに誠実に答えることから始めています。そして教える立場以上に、私が感じたような安心を与えられる存在にいずれなりたいと願っています。 

別紙謝罪記事目録

第 1

(1) 謝罪記事掲載の場所

5 本件ウェブサイトトップページ (<http://www.mynewsjapan.com/>) の上部
(スクロールをしなくても閲覧できる場所)

(2) 謝罪記事における文字

赤文字

10 第 2

「東進」(株式会社ナガセ)殿に深くお詫びします。当社は、平成 26 年 10 月 15 日、当社の運営する本ウェブサイトの「ワーカー」欄において、「マイニュース」として、『「東進」はワタミのような職場でした—ある新卒社員が半年で鬱病を発症、退職後 1 年半で公務員として社会復帰するまで』と題する記事を掲載いたしました。15
ましたが、「東進」がワタミのような職場であるという事実はなく、そのほか種々の誤りがありましたので、ここに前記記事を取り消し、株式会社ナガセ殿に深くお詫びいたします。

平成**年**月**日

株式会社 MyNewsJapan 代表取締役 渡邊正裕

20 株式会社ナガセ 御中